



地域発信の国際協力を目指して ～島根県邑南町から

一般社団法人コミュニティパートナーズ理事 NPO 法人ピースウィンズ・ジャパン職員 束村 康文

島根県邑南町

島根県の中山間地域に、里山といった言葉がぴったり合う人口約1万人の邑南町おのなんちようがあります。冬には雪が降り、夏は冷涼、雪解け水が豊富で、おいしい米や野菜の産地となっています。地理的には広島市内から車で約1時間半、島根県の県庁所在都市の松江からは約2時間かかる遠隔の地です。町行政が看板をあげて推進しているのは、日本一の子育て村、「A級グルメ」食と農による町づくりなどがあり、また、一住民として感じている町の特徴としては、住民自身によるコミュニティ開発のさかんな町で、それがさまざまな町づくりに活かされていると思います。



邑南町の風景

地域の資源を活用した 国際協力と交流

一般社団法人コミュニティパートナーズ（略称 CP）は、邑南町内の数人で設立し、村づくりと国際協力を行っています。現在、団体では、役場からの委託で地元の小学校跡を活用した研修宿泊施設の運営や農家民泊の事務局と、独自の活動としてミャンマーやスリランカからの研修の受け入れをしています。

日本の地域には、国際協力に参考になる地域資源がた

くさんあります。地域に根差した、さまざまな困難な課題を解決した実践があり、うまくいったこともあればうまくいかなかったこともあると思いますが、そのプロセスから教訓を得られることがたくさんあります。

いまの活動の前身となっているのが瑞穂アジア塾（任意団体）です。平成の町村合併前の瑞穂町時代に、アジアとの交流を通してお互いに学び合える機会をつくろうということでできたグループです。過疎化という言葉の発祥の地は中国地方と言われていますが、当時は、都市への人口流出を食い止めるため、公共施設や道路を整備し、企業誘致によって農家の収入を増やし、村おこしのイベントや、大分県の一村一品を参考にした集落一品運動といったことがさかに行われていました。そのような頃、町内の数人でタイの北部山岳地域を訪問し、そのときのボランティア活動や農村の暮らしの風景は、自分たちの住む邑南町の農業や生活改善、母子保健や衛生の向上活動、それに協働して村づくりに励んでいた青年団の活動を彷彿とさせるものでした。この体験を通して、言葉や文化の違いを超えて、アジアの農村と住民同士の交流ができるのではないかと考えがはじまりになっています。アジアで活動をしている NGO からの紹介で、スリランカ、ソロモン諸島、パプアニューギニア、ミャンマー、ベトナムから、数か月～1 年程度での研修の受け入れをしてきました。

研修受け入れをして、農村での開発という視点で比較しながら見ていくと、双方で何かしら学び合えるものが見えてきます。地域資源としては、例えば農業振興や産業振興、村落給水や小規模発電などの小規模インフラ、へき地医療や地域福祉などいろいろあると思います。地域資源を生み出している地域の開発の歴史、地域資源を支える集落の自治会活動、青年団活動、地域の民衆芸能活動、農業の共同作業、寺の集まりなど、農村特有のさまざまな活動全体が人材を育成し、コミュニティをつくる基本になっています。

国際協力促進モデル事業

自治体国際化協会のモデル事業で採択された平成 25 年度「住民と行政が連携したコミュニティツーリズム手法による地域振興計画の作成協力（ベトナム）」について紹介したいと思います。

邑南町では、約 10 年前から農家での体験や宿泊の受け入れを行っており、邑南町田舎ツーリズム推進研究会の事務局を CP で受け持っています。地元で、民泊ができる農家として登録して稼働している農家は 25～30 世帯です。農家での体験型滞在により、農村と都市との交流促進、観光による地域活性化を目指しています。一般の方々とともに、中学校や小学校からまとまって体験に訪れます。また島根大学の留学生が大学の国際交流センターの企画により数十人で町民との交流と農家民泊を体験します。

自治体国際化協会のモデル事業はベトナム中部のフエ市を対象に、王宮などの世界遺産のある市街地とは対照的に、農村が都市への流出や農業離れ、伝統的な文化の衰退の課題に直面しているという問題意識から始まりました。邑南町田舎ツーリズムで進めている農家民泊や農家レストラン、花桃を活用した集落の魅力化をすすめている集落、産直市、先進農家の視察を行い、地域資源を活用して地域振興を推進するための問題意識の啓発や企画立案能力の向上を目指したもので、ベトナムでの 3 か年計画の立案の参考にしました。アジアも日本も農村



農家民泊の農家さんと（両側が研修で来たミャンマーの方）

は同じような課題に直面しています。

もうひとつの例として、地域福祉の経験を活かした国際協力があります。中山間地域は、若年層の都市への流出で早くから高齢化がすすんでいて、邑南町でも高齢化率が 40 % を超えるにいたっています。高齢化の先進地域とも言えます。このような中、平成 28 年度「高齢者福祉人材育成



来日の国際 NGO のスタッフと事業計画について打ち合わせ @邑南町田所公民館

事業（ミャンマー）」をモデル事業で実施しました。ミャンマーでは新たな政権で国づくりが始まっていて、福祉政策もそのひとつです。日本の NGO ピースウィンズ・ジャパン（本部広島）の協力で、CP はミャンマー現地の NGO で高齢者福祉を専門にするイギリスが本部の NGO（Help Age International）と連携して、この事業をすすめています。邑南町から専門家を派遣、NGO 職員と政府職員の研修受け入れをし、来年度はミャンマーでのセミナー開催を行います。目指すのは、公的な制度や資金が無い中での既存のコミュニティ活動や人材資源を活かした活動です。ミャンマーでは制度をつくっていくプロセスとともに資金的な裏付けのための制度の導入をはかりながら、村の地域福祉の自立的な活動を活用していく考え方が必要となっています。一方で、日本では地域福祉をすすめてきた歴史がある一方で、現在は制度が整っていて、制度の枠組みの中での福祉の活動が行われています。いま、制度が整っていないミャンマーから学ぶことがあります。また、研修を受け入れる準備をすすめることが、地域の人材や経験を知る機会になり、次世代が福祉で働く関心を高めることにつながっています。

相互交流は、マイナスをプラスのインパクトにできる

現状は困難でも解決に向けた取り組みは、日本と途上国の相互の人々の学び合いの機会を提供でき、双方にプラスのインパクトを生み出します。さまざまな分野の国際協力にチャレンジすることは、途上国への一方的な社会貢献ではなく、日本国内で働く地域の人材を育成するチャンスと捉える自治体や地元 NPO がたくさん増えてくることを期待します。